

美術と情報を結ぶ —「アート・ドキュメンテーション」とともに45年—

波多野 宏之

はじめに

2016年3月をもって、駿河台大学を定年退職した。社会に出て45年になる。この間いくつか活動の場所は変えたものの、美術と情報にかかわる「アート・ドキュメンテーション」の分野で仕事してきたのは僥倖というほかはない。本稿では、その歩みを振り返って概略を記するとともに、これまで支えていただいた先輩、同輩、後輩への謝意を表すものとした。

1.<美術と情報>という選択

半世紀前を振り返れば、1960年代——。いま2020年東京オリンピックを控えてさまざまな期待や課題がかまびすしいが、筆者は1964年、東京オリンピック開催の年に上京して大学に入学した。ベトナム反戦、5月革命、全共闘運動といった熱い季節を経て、1970年秋三島由紀夫の割腹自決という劇的な事件で一つの時代の終息感を味わった。こうした矢先の1971年3月、武蔵野美術大学（通称〈ムサビ〉以下、武蔵美）の美術資料図書館（現、美術館・図書館）が最初の職場となった。

大学でフランス語を専攻し、フランスの芸術文化史、とりわけ1920年代の芸術思潮に関心を抱いていたから、さて、こうした思いを引きずりつつ職を得るには！？と考えあぐねていた。折よく、この施設が美術作品も関連図書資料も扱う美術館兼図書館であり、海外資料も収集するので語学の素養のある者を募集するという。学芸員と司書の仕事を総合的にこなす、というのがこの施設の理念であり、さらに言えば、いわゆる司書でもなく学芸員でもないものを採用し、いずれにも偏らな

い総合的な資質を現場で錬成する方針ということも、大学で資格を取得する機会のなかった筆者には「とりあえず」申し分のない職場に思われた。

武蔵美は総合的な美術大学として、日本画、油絵、彫刻、デザイン（商業、工芸工業、芸能、基礎）、建築などの学科・専攻をもっていた。これらの分野の関係資料はもとより、当時の館長田澤坦教授が陶磁史の専門家であったこともあって、いわゆる「六古窯」の壺などの収集も行っていた。また、民俗学の宮本常一教授もこの頃大学に招かれて民具の収集を進められ、その主要なものは美術資料図書館の管理に委ねられていた。教員の作品展や学生の卒業制作展のほか、さまざまなテーマによる企画展を施設内のギャラリーで開催し、その設営をすべて館員の手で行っていた。

施設（設計：芦原義信）が開館したのは筆者が入職する4年前の1967年。実務の中心を担われた大久保逸雄氏は、美術にかかわる資料を統合的に管理活用する「美術資料の体系化」を唱道されていた。こうした実践は、終業後に自由参加で行われた情報検索等にかかわる洋書輪読会などによる理論的な探究と相俟って、美術資料図書館はこの分野における今後の方向性を深化する格好の場所であり、筆者にとって予期にたがわぬイニシエーションの場所であった。今日、歴史的に見てもこの施設がパイオニア的な存在であったことは間違いないであろう。コレクションの形成はもとより、後に『美術家索引』の偉業で知られる恵向院白氏や、アートカタログ・ライブラリーでも活躍された故種市正晴氏などの人材を輩出している。

さて、こうした環境の中で筆者は、主として図書資料の受け入れと美術資料（美術作品からポスター、チラシなどのいわゆる〈エフェメラ〉など）

の収蔵管理、展示等の一端を担った。この最初の職場で〈美術と情報〉を結ぶ、という選択をし、それなりに充実した実務やその後も長く続く学生(在仏の彫刻家山田正好氏)等との稀有の出会いがあった一方、やはり基本的な図書館学、博物館学を学んでおく必要性も痛感されて、3年半後、職を辞して司書、学芸員の資格を取得したうえで次の展開を目指すこととした。

当時(1960～1970年代)の公共図書館の状況は、1963年に『中小都市における公共図書館の運営』(いわゆる「中小レポート」)が刊行され、また、これを受けた形で東京都が打ち出した『図書館政策の課題と対策: 東京都の公共図書館の振興施策』(1970)によって、とくに三多摩地区で新たな公共図書館づくりが進行しつつあった。折よく武蔵美の所在する小平市が最初の図書館を建設するという。こうして1974年10月、図書館業務経験者としてその開設業務にあたった。勤務に着いた時には既に建設工事が始まっていたが、家具の選定、書架のレイアウトといった図書館のハードウェアに関わる業務の一端を経験できたのは後に大いに生かされることになった。選書、整理、開館準備、各種マニュアルの整備などを館長のもとで進め、こうしてまず地域館としての小平市仲町図書館が翌1975年5月にオープンした。しかし、筆者は同年7月には、東京都立中央図書館に移ることになり、ごく短期の在職で片山務館長以下同僚にも迷惑をおかけした。後年、小平市中央図書館が郷土・行政資料アーカイブズも兼ねた施設として完成し、全国的にもその名を知られるような活動を展開するが、これも仲町図書館時代からの館長の指導によるものであり、その中核を担ったのも当時の同僚たちであった。片山氏はその後も図書館協議会会長として貢献され、離職後の筆者を委員に加えていただいたこともあり、武蔵美時代を含めて小平市との関係は長く続いた。2015年、仲町図書館が〈なかまちテラス〉(公民館との複合施設 設計: 妹島和世)に生まれ変わった際にも、館長以下最初期の同僚との再会の機会を得た。

2. 公共図書館とフランス

図書館学の基本をより広い立場から実践しよう、との思いで公共図書館に入ったものの、美術やフランス語の世界からは、ずいぶん遠のいた感じがしていたことがこの転職の背景にあったように思う。新たな職場となった東京都立中央図書館は、1908(明治41)年、東京市立日比谷図書館として設立された都立日比谷図書館の新たな展開型として港区有栖川公園内に1973年に開館していた。日比谷図書館と三多摩地区にあった都立図書館三館が個人貸出を中心機能としていたのに対し、新たな中央図書館は、個人貸出なしの参考調査機能および、都内区市町村立図書館へのいわゆる〈協力貸出〉機能という新機軸を打ち出していた。中央図書館の新設に際して、俗に言う団塊の世代に属する大卒有資格者が多数採用され、中央図書館約170名、日比谷図書館約60名、合わせた在籍館員数は約230名という大所帯であった。中央図書館では主題別閲覧制度と称して、一般参考、社会科学、人文科学、自然科学、東京室等の各室に職員を配置し、資料収集面では英独仏等洋書の収集も本格的に行っていた。そこには小規模図書館とはまた別の可能性があるように思われた。

実際、ここで筆者は1992年9月まで、約17年間在籍し、部門としては企画協力課協力係、参考課一般参考室、同人文科学室、同特別文庫室、逐次刊行物課収集担当などを経験した。外国語の堪能な職員も多く、洋書の担当になることはなかったが、美術を含む人文科学室、錦絵等画証資料を多く所蔵する特別文庫室はある種の美術図書室であったともいえ、貴重な体験となった。図書館であるから共同作業で各種の書誌・索引カード類を作成・維持しており、人文科学室では美術全集に収載された個々の作品図版に画家名、作品名からアクセスできるようにする「美術全集絵画索引」をカード目録として採録維持していた。これは後に『西洋美術全集絵画索引』としてCD-ROM付きで日本図書館協会より公刊されている。特別文庫室では、その名が示すように、さまざまな由来

による十余のコレクションを有し、とりわけ草双紙、錦絵、古地図等からなる東京誌料、黄表紙・洒落本のほか例えば、引札など一枚摺資料の貼込帖『鶏肋雑箋』などを含む加賀文庫に貴重なイメージ資料が含まれており、国内外の美術・歴史研究者や出版・報道関係者の利用も多かった。

他方、フランス語に関しては、前述した日比谷図書館からフランスに留学した先輩がおられ、日仏図書館学会（後に日仏図書館情報学会）に参加するよう勧誘された。当時お茶の水にあった財団法人日仏会館には日本フランス語フランス文学会など各分野の学会が関連学会としてあり、そのうちの 하나가日仏図書館学会であった。この学会は、フランス政府給費留学生として図書館学や文書館学を学んだ関係者が、かつて日比谷図書館館長でもあった仏文学の杉捷夫先生をいただいて結成されていた。筆者は学会入会后、図書館関係用語研究グループの勉強会に参加するとともに、新たに公共図書館研究グループを組織した。こうした活動から、『日仏図書館関係用語集』、『フランスの公共図書館』『フランス図書館・情報ハンドブック』などが生まれた。拠点となった日仏会館図書室の司書、岡田恵子氏は長く学会の事務局も担当され、図書館分野で初のフランス政府給費留学生であった小林宏氏（後に栃木県立足利図書館長、学会会長）とともに、多くの後進に道を拓かれた。

筆者もその恩恵にあずかった一人で、幸い給費留学の機会に恵まれ1984-85年、東京都のルールにより休職して滞仏した。当時は鈴木都政の緊縮財政下にあって職員組合の人員補充要求も困難で、休職といえども必ずしも容易ではなかった。当時の館長はパスカル研究で著名な前田陽一先生で、兼務されていた国際文化会館の部屋で相談に乗っていただいたものである。フランスでの受入れ館は、1977年にオープンした国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センター公共情報図書館（略称BPI）であった。先に日仏図書館学会が日仏会館の日仏交換教授プログラムに応募し、BPI館長を日本に招聘しており、筆者も同館長の面識を得ていたことが大いに役に立ったと思っている。

BPIではさまざまな部署で研修し、言語メディアテーク（百余の言語が学べる部門）のカウンターに出ることもあったが、最もインパクトが強かったのが画像資料課であった。今でこそネット上でさまざまな画像が入手できるが、当時は静止画像といえばアナログ写真の時代。図書館資料や大学教育などではプリント写真かポジフィルムをマウントしたいわゆるスライドが一般に使用されていた。こうした中、BPIの画像資料課では、収集したスライド写真をオランダのフィリップス社が開発したレーザーディスクに蓄積する作業を行って、大量の画像を容易に活用することを可能にする実験を開始していた。このことは、画像ドキュメンテーションの将来を示すものとして画期的なことと思われた。また、この滞仏中に国際図書館連盟（以下、IFLA）美術図書館分科会のヨーロッパ集会としてジュネーヴで開催された〈眼で聴く〉と題する研究集会に参加する機会があった。自身も東京都立中央図書館特別文庫室における錦絵等画証資料の活用について発表した。同時に、諸外国における画像ドキュメンテーションにかかわる多くの発表に接することができた。これらのことがその後の筆者の進むべき道を決定的なものとした。

帰国後は都立中央図書館に復帰する一方で、翌年の1986年8月、IFLA年次大会が東京で開かれ、その美術図書館分科会の受け皿的な活動を行った。その中心となったのは前述した武蔵美の大久保逸雄氏であり、この大会を通じて我が国における美術図書館関係者の交流の萌芽が形成された。他方、美術史関係者とも連携を深め、同年秋、日仏美術学会において知己のフラン人専門家も招へいして研究集会を開催し、美術史研究者と美術情報の重要性についての問題意識を共有する機会となった。

3. 研究会設立と美術館

こうした経緯のなかから、欧米で形成されている全国レベルでの職能組織をつくろうという機運が盛り上がり、1989年、アート・ドキュメンテーション研究会（後に学会 Japan Art Documentation

Society 以下、略称 JADS)が発足し、水谷長志氏(東京国立近代美術館)、住広昭子氏(東京国立博物館資料館)と小生の三名が世話人となった。事務局を担ってくれたのは、武蔵美時代に美術洋書を納入されていた村上正樹氏。図書館員も美術館学芸員も美術史研究者も情報関係の技術者も出版社・書店員も同じ立場で研究会に参加していたが、その背景としてかつて上記、杉捷夫先生が「たとえば、図書館では出版社、を業者と呼ぶのです。文化に貢献している人を業者、ですよ。」と批評されていたことが、少なくとも筆者の中ではバックボーンになっていたと思う。

研究集会、機関誌の発行等で多忙になっていた1992年、国立西洋美術館(以下、略称西美<せいび>)から声がかかり、いわゆる「割愛」の形で地方公務員から国家公務員へ移籍することになった。ここでは高階秀爾館長以下上層部にアート・ドキュメンテーションが業務に直接的に関係する分野であるとの理解があり、1994年4月以降、研究会の事務局も西美に置き、終業後に役員会を開催するなど、会の発展にとって大きな支えとなった。

ともあれ、表面的には公共図書館一般でなく、美術に特化した情報資料活動にはほぼ18年ぶりに復帰することになったわけである。しかも、西洋美術館であるから外国語資料の収集等が重要であることは言うまでもない。当時、西美では内部用の資料室はあるものの、外部に公開はしておらず、職員(研究員)の紹介による訪問者がある程度で、閲覧室もなかった。ある美術研究者に「西美の資料室には門がかかっている」と言われるほどで、公の機関であるのに外部に開かれていないという批評であった。こうした状態を美術館側が看過していたわけでは決してなく、資料室担当は美術史系研究員が兼務していた状態であったから十分な対応ができなかったに過ぎない。研究員が選書して直接海外の美術専門書店、古書店に発注し、簡単なデータベースソフトが導入されて入力作業はアルバイトの美術史学生に委ねられていた。

ところで、着任2年後の1994年はインターネットが日本に本格上陸した年であり、秋には各国立美

術館・博物館に大型補正予算がつき、それぞれに情報システム構築が行われ始めた。西美でも図書システム、美術作品システム、メールシステムなどを構内LAN上で運用するシステム構築を始め、筆者は当然その責任者となった。

他方、国立美術館・博物館では研究員の在外研究(国内研究)制度があり、順次各自の専門分野に応じて原則1年間日常勤務から離れた。西美の研究員は海外の美術館などに滞在し、そこで作品の調査研究を行い、何年か後に企画展示などとして実現するというのが一般的なケースである。筆者はルーヴル美術館にある文化省中央図書館・アルシーヴ——フランス革命以来の伝統ある施設を選び、ここを拠点に国としての美術情報資料管理運用の状況を調査することを主たる目的として1995年秋から約1年間滞仏した。この施設はもとより、ルーヴル美術館の各部門ごとに置かれたドキュメンテーション(Centre de documentation)の実態などもつぶさに知りえたのは大きな収穫であった。絵画部門の例では、各作家、各作品ごとに関連する切抜資料、論文抜刷、メモなどをファイリング化した資料室であり、美術史の素養とドキュメンテーションの技術を身に付けた専門のドキュメンタリストを配しており、ここに蓄積された情報が充実した展覧会カタログなどに結実する仕組みである。

着任後3年目にして1年間席を空けるというのはさまざまな面で困難を伴った。上記情報システムの構築においては基本システム設計を終え、さまざまな実施設計の途路であったので、非常勤の研究補佐員堀越洋一郎氏(後に武蔵美教授)と毎日のように連絡を取り合って、どうにかシステム稼働までこぎつけた。同氏には長期にわたりJADSの事務局を担っていただいており、実質的な右腕として貢献していただいた。

また同時に、1994-97年度の4か年計画で大型の共同研究に着手し、科学研究費も得てその研究代表を務めていた。これも第2年次は他の美術史系研究員に代表を委ねた。全体の進行にあたっては筆者が海外から連絡し、帰国後はまた実際のまと

め役をこなしたものの、当時の関係者の協力には今もって感謝に堪えない。

他方、ほぼこれと同じ時期に美術館ギャラリーの拡張のための工事が着工している。1994年秋のことである。この一部地上、大部分が前庭地下となる施設はのちに「企画展示館」と称されることになるが、これに付随して資料室や修復室などを設置するための工事も行われた。資料室拡張計画としては、既存資料室のある新館（ル・コルビュジエが設計した本館の背後に接続して建設された建物）の地下とこの企画展示館をつなぎ、その一部と連結させて資料室を拡張するという案を提案した。閲覧室や書庫スペースを確保し、内部研究員の利用と同時に外部専門家への公開を実現しようということである。1997年12月、企画展示館のギャラリー部分は竣工したが、資料室の工事はさらに続き、家具等を調整し最終的に名称も「研究資料センター」として開室したのは2002年3月であった。これには小平市図書館や日仏会館の恵比寿への移転にあたり図書室を含めた新館の建設委員として携わった経験が役に立った。また、IFLA年次大会参加などを機に多くの海外美術図書館を見聞していたことも大いに参考になった。

なお、図書室やアート・ライブラリーの名称を用いなかったのは、公共図書館等で所蔵する一般的な入門書の類は所蔵せず、洋書、研究書を中心とし、あくまで美術館業務や美術研究に即した資料を置くこと、また膨大な数のマイクロフィッシュ（多くが画像資料）の存在、作家、作品に関わるファイレリング資料（規模は遥かに小さいが、先述したルーヴル美術館におけるドキュメンテーションと同類）を運用していることなどが理由である。

さて、今日、デジタル画像の利用はすでに一般的になっているが、これに至るまでにはかなり長い歴史がある。TV映像技術がNHK主導によるハイビジョンという呼称のもと、静止画、動画ともに当初はアナログで応用され始めた。もっとも早い導入例が岐阜県美術館で1989年のことである。西美でも1992年には凸版印刷の協力で「アートハイビジョン・データベース」と称するシステムが

入り口近くのコーナーに置かれた。その後、筆者の入職後、1999年には、「デジタルギャラリー：超高精細画像検索表示システム」を公開した。さらに、2001年秋には、内外の美術関連システムをそのコンテンツとハードウェアを併せて展示し、デジタル技術の可能性を論議する連続セミナー「デジタル技術とミュージアム」を4週間にわたって開催し、これには延べ約8,000人の来館者があった。こうした展示の試みは東京大学総合研究博物館で坂村健教授等が手掛けられた「デジタルミュージアム[1997]、2000」に次ぐ、ごく早い時期のものであった。この2001年秋が特に忘れがたいのは、9月11日、展示準備で滞在中のフランス美術館修復研究センター（ルーヴル美術館構内）訪問時にあの大参事の報がもたらされたからである。その翌日にはエッフェル塔も危ない、といったうわさもたちはじめた、そうした一時期であった。上記展示、セミナーに際して同研究センターの関係者が来日されたことは言うまでもない。

翌2002年3月に研究資料センターをオープンし、週2日開室でサービスを開始した（現在は週3日開室）。情報システムの構築とその関連での展示会の実施、そして研究資料センターの一般公開という懸案が落ち着き、これに続く1年間は日常業務中心に経過した。当時、美術館全体としては2001年度から制度改革がなった国立美術館・博物館の独立行政法人化の2年目にあたっており、中期計画や年度計画の策定、自己点検、外部評価が行われつつあり、情報資料部門もまた、事業全体の中にその重要性が位置づけられるようになった。上述したように、基盤となる情報システムや研究資料センターが一定程度整っていたことは時宜にかなったことであった。

さて、この西美の職場環境で裨益したことの一つは、IFLA美術図書館分科会役員としての活動も許容されたことであった。前職場に在職中の1991年モスクワ大会で常任委員に選出され、その後1993年バルセロナ大会ではセクレタリーに指名されていた。常任委員であれば都合により大会欠席も許されようが議長に次ぐセクレタリーとなればそれ

はあり得ない。幸い国際交流基金、文部省の国際研究集会派遣等で毎年夏、両方の任務の終了する1997年コペンハーゲン大会まで各年次大会に参加できた。大会期間中にはなぜか重大事件・事変が起こっており、1991年にはモスクワでの政変に直接遭遇、1994年ハバナではフロリダに向けて不法出国者がゴムボートやタイヤに乗って漕ぎ出す姿が常態化して目の前に展開していた。また、1997年コペンハーゲンではプリンセス・オブ・ウェールズが亡くなった、と分科会議長ヤン・ファン・デル・ワテレン氏(V&A美術館図書館長)が悲痛な声をあげた。ともあれ、各国からの参加者とさまざまな国際的な話題について話ができた。モスクワ政変に際して日本からのIFLA参加団の一員となっていたため、大会本部の会議継続の決定にもかかわらず意に反して早期の帰国を余儀なくされたのは心外極まりなかった。Japan as number oneと揶揄されたのも当然であったろう。

4. 教育の現場で

2003年3月末、国家公務員の定年まで3年を残して退職することとした。懸案の翻訳や執筆活動を、というのが当初の心づもりであった。実際この2003年はこれまでにない自由な時間が持て、10月には白水社文庫クセジュからジャック・サロワ著『フランスの美術館・博物館』(共訳)を刊行できた。著者のサロワ氏は元フランス美術館総局長で、ルーヴル美術館入口をガラスのピラミッドで覆うなどのいわゆるグラン・ルーヴル計画も推進した行政マンであり、上述した2001年秋の滞仏時にお会いしていた。ただ、執筆活動を、という部分は少し異なる形に展開した。というのも、1999年から駿河台大学大学院文化情報学研究科の非常勤講師を委嘱されていた縁もあって翌2004年より文化情報学部で教鞭をとることとなったからである。JADSで講演をお願いして以来知遇を得ていた安澤秀一先生や学会員でもあった戸田光昭先生とのご縁が大きい。これまでの経験を伝えることができるとすれば、文化情報学部はまた新しい活動の場であ

ろうと思われた。大学での教育に関しては、ちょうど西美に移った1992年秋より慶應義塾大学で非常勤講師として「視聴覚教育」(後に視聴覚教育メディア論)を担当したのをはじめ、1997年から2000年まで放送大学客員教授として司書教諭科目「図書館資料論Ⅰ」(当時)を担当していた。現在の「学校図書館メディアの構成」と「情報メディアの活用」にあたる科目で、初年度は「印刷物からマルチメディアへ」と題したテキスト作りから45分15回分の収録のために多忙を極めた。放送の視聴とレポートによって司書教諭資格を取得できる最初の年度であり、とくに現職教員の受講が多く、レポートの採点などでも苦勞した。高鷲忠美客員教授(元東京学芸大学教授)がこの司書教諭科目の中心におられたが、図書館短大の講習において資格取得した際の恩師で、ここでも大変お世話になった。

さて、2004年に着任した当初の担当科目は、ゼミ科目のほか、環境芸術論、文化環境設計論(この2科目は前年秋学期より非常勤講師として担当していた)、記録情報学、電子記録システム論、情報メディアの活用、博物館実習、それに大学院での美術情報資源論特論であった。その後、環境芸術論はメディア・アート論に、文化環境設計論は都市と文化施設に名称・内容の変更をした。詳細は省くが他にも複数の科目を担当し、近年は芸術文化論(後に芸術学)で西洋美術史の基礎を講義する機会も得た。こうしてみると、図書館情報学、博物館学、アーカイブズ学、芸術学と広範な分野にわたる科目を担当させていただいたことになる。

アート・ドキュメンテーションに関しては、博物館・文書館ドキュメンテーションを前任者から引き継ぎ、これは2006年のカリキュラム改訂によりアート・ドキュメンテーションと科目名変更して2008年度より適用された。副題を「博物館や文書館の機能をアート・ドキュメンテーションの観点から学ぶ」としたが、MLAの表現がかなりの認知度を持ち始めた2010年度からは「MLA(博物館、図書館、文書館)の機能を・・・」に変えた。いずれにしても取り扱う資料の特性やMLA相互

の連携など基礎的な内容を扱うものであった。

3・4年次生の専門ゼミでは、図像学、展覧会カタログ、コレクション、絵葉書などをテーマとし、学生たちは調査のまとめを秋の駿輝祭でゼミ展示として発表した。また、年度末には学生諸君が取り組んだ成果をまとめた『ゼミナール論文集』を刊行し卒業式当日に配布した。専門ゼミを選択する導入としての2年次生プレゼミナールを担当する機会は少なかったが、コレクションへの関心を引き出そうと、松方コレクションや台北故宫博物院などに関連した映像を見せ、ポミアンの『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』を拾い読みした。興味を抱いた優秀な学生が複数いたが、次年度は筆者の在外研究が決まったため3年次ゼミが開講できず、学生には申し訳ないことであった。大学院科目、美術情報資源論特論は、いわばアート・ドキュメンテーション特論であり、これを履修し、また筆者が演習担当あるいは修士論文指導を担当した学生が今日、国立大学付属の文書館、美術館、有力私大の漫画図書館、あるいはフリーのアート・ナビゲーター等として実績を上げ、JADSや日仏図書館情報学会等の役員としても活躍してくれているのは頼もしい限りである。

こうした教育の一方で2013年秋から2014年春にかけての半年間、在外研究の機会を与えられ、国立文化財学院招聘研究者としてパリに滞在した。これはフランスにおける美術館・博物館・文書館・文化財・考古学等広範な分野における上級公務員（文化財学芸員）を養成する機関である。その教育のありようを講義や資料を通じて、また学生の入学動機などを直接聞くよい機会となった。併せて、パリ第3大学における文化メディアシオン関係の教育研究、図書館等における美術作品貸出ギャラリーであるアルトテークの活動などに関し多くの知見を得た。本学の紀要にもその一端を記したが、今後とも何らかの場を得て我が国のアート・ドキュメンテーションや MLA 連携等に資したいと思う。なお、この在外研究に際しては、当該年の学部専門ゼミ、大学院の（修論）演習の学生を複数の同僚教員に分担して引き受けいただき、感謝

に堪えない。とりわけ（修論）演習1年次の学生については今村庸一教授にお引き受けいただき、情報文化研究の基本となるべきブルデューの文化資本やドゥブルのメディアオロジーなどを含む西欧思想を講じていただいた。こうしたテーマについては筆者も同教授と文化情報学研究所の研究会や普段折りに触れて話題としていただけに、学部・大学院教育のベースとしてより広い場で展開できればよかったと悔やまれる。なお、今村教授と塚本美恵子教授には、筆者の関係する公益財団法人放送番組センター（放送ライブラリー）の収集したTV番組映像をネット経由で大学教育の教材として使用する試験的プロジェクトにご賛同いただき、2016年度に実施していただいた。ここに記して感謝したい。

話が少し横にそれたが、在外研究に戻ってひとつだけ触れておくと、滞在中、元フランス美術館総局長ジャック・サロワ氏に再会したことが特筆される。氏はその著者『フランスの美術館・博物館』でも所蔵作品管理の重要性を力説しているが、その具体策として美術品目録点検委員会という国家機関を創設し、自らがその責任者となり各館が所蔵する作品の目録点検管理を実施させる、いわばお眼付け役を担われている。氏は美術館行政に携わる前は会計検査院主任評議官などを務めたこの道の専門家であり、そうした観点からの美術館の監察を行っているわけで、氏による制度設計とその実践は、美術館・博物館事業の点検評価という点でわが国でも大いに見習うべきと思われる。

おわりに

図書館、美術館、大学等の現場、そして研究会・学会での共同事業と多くの時間を周囲の仲間と進めてきた。上記で触れなかったことに、他機関の委員や共同研究にも多く参加させていただいたことがある。ここではその一例として国立民族学博物館との関係について触れておきたい。情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会を機縁として杉田繁治教授の主宰された同館情報システム運営

委員会の末席に連らなつた。1990年代の終り頃であつたか展示資料解説用携帯端末「みんぱく電子ガイド」の開発はまさに今昔の感があるが、泊まり込みでの談論風発など関西の開けた気風を感じた。また、フランスでジャン・ルーシュに師事された映像人類学の大森康宏教授主宰の研究会では科研の国際共同研究への参加などで現地の共同研究者と行動を共にするなど、貴重な経験となつた。

アート・ドキュメンテーションという分野で、とりわけ写真、映像関連のいわゆる画像ドキュメンテーションに主たる関心を注ぎながら、45年経ってみるとJADS会長をはじめ関連の研究会、学会のかじ取り役を担った、いわば運動の旗振り役を果たしたに過ぎないように思う。しかし、何とか新しい世代にバトンタッチができたのは幸いであつた。ただ、心残りは専門職の社会的地位の問題である。JADSでは教育・研修をテーマに特化した研究グループをつくり、戸田先生をはじめ木村三郎氏(日本大学芸術学部教授)、本学非常勤講師もお願いした若月憲夫氏(野村工藝社)、博物館・記録管理等で幅広い実務を手掛けておられる毛塚万里氏らで専門家養成のためのカリキュラムを考えたりしたが、諸般の事情からその実現には至っていない。美術館・博物館においては、情報資料担当者は正規職員として一人配置されればよい方で、有能ながらその多くが非常勤ポストに甘んじている。西美においても、複数の非常勤研究補佐員の方々の尽力でセンターの運営が成り立っていた。これが日本の現状であり、人員削減のなかで状況は悪化する気配さえある。アーカイブズの意

義が(そしてアーカイブズという言葉そのものが)多少なりとも社会的に認知されつつある現在、事態の好転を願うばかりである。

最後に個人的なことになるが、近年は在籍した国立大学の、55年間存在し今は廃寮となつた学生寮関係のアーカイブズ資料を収集・デジタル化する作業を仲間とともに手がけ、2016年秋、これらを母校の文書館に寄贈した。今後とも収集を継続し、OBと文書館との仲立ちになればと思う。

他に、出身地での高校生通学路支援活動を地元の仲間と続けており、この活動の一つとして通学路にある店舗に〈アートの本棚〉と称する空間をつくり、展覧会カタログや美術入門書、絵本などを置いて、自由な閲覧・貸出の場としている。秋の読書週間には高校図書室に出張展示するなどの活動も行ふ、ある種の蔵書開放である。まだ図書・雑誌合せて800冊程度、関連した展示やワークショップの開催も年1~2回に過ぎないが、過疎、少子・高齢化の進む地方都市にあって、地域振興の一助となればと思う。郷里ゆかりの美術家加藤大象、藤田隆治等の事績も調べみたい。肩肘張らない、アート・ドキュメンテーションとなろうか。

こうして約半世紀を振り返ってみると、美術にかかわるさまざまな場において、情報技術の進展に対応した職務を展開できたことが改めて感慨深く感じられる。そして、そうした体験を踏まえて本学での講義ができたことは大変幸運であつた。

この拙文でお名前を挙げさせていただいたのはお世話になつた方々のうちごく一部にすぎない。末尾ながらすべての関係者に深く感謝いたします。